

平成17年3月25日

水産庁

独立行政法人水産総合研究センター

西海区水産研究所

平成16年度第2回東シナ海漁況海況予報

- 2005年9月までの期間の東シナ海から日本海西部の海域における海況と漁況について、別表の水産関係機関が検討し、独立行政法人水産総合研究センター西海区水産研究所がとりまとめた結果 -

今後の見通し(2005年9月までの期間)

海況

- (1) 九州南方海域の黒潮は、「屋久島南付近での変動」で経過する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、「平年並み～やや高め」で経過する。

漁況

- (1) マアジ、マサバ、ゴマサバ、カタクチイワシの来遊量は前年を上回る。
- (2) マイワシの来遊量は低調であった前年並み。
- (3) ウルメイワシの来遊量は前年を下回る。

1. 本予報は水産庁のホームページ(<http://www.jfa.maff.go.jp/release/index.html>)、水産総合研究センターにおける我が国周辺水域資源調査等推進委託事業のホームページ(<http://abchan.job.affrc.go.jp/gk16/16gkindex.htm>)に掲載されます。

2. 本予報の内容等に関する問い合わせ先は、以下の通りです。

水産庁増殖推進部漁場資源課沿岸資源班 担当:青木・宮崎(潤)

住所:〒100-8907 東京都千代田区霞が関1-2-1

電話:03-3502-8111(内線:7376) 03-3501-5098(直通)

ファックス:03-3592-0759

電子メール: jyunta_miyazaki@nm.maff.go.jp

水産総合研究センター西海区水産研究所企画連絡室

住所:〒851-2213 長崎市多以良町1551-8

電話:095-860-1662 ファックス:095-820-7767

電子メール: kiren@affrc.go.jp

(海況担当:中川倫寿 095-860-1623;漁況担当:檜山義明 095-860-1634)

平成16年度第2回東シナ海海況予報

1. 今後の見通し(2005年4月～2005年9月)

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域の位置は、6・7月頃には「離岸傾向」となるが、一般的には「屋久島南付近での変動」で経過する。

(2) 表層水温

前半、後半ともに、山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甕沖、沖縄島周辺海域、大陸棚上では「平年並み～やや高め」、薩南沿岸、黒潮域では「平年並み」で経過する。

2. 経過(2004年10月～2005年3月)

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部:10月「平年並み」、11月「やや高め」、12月「はなはだ高め」、1月「やや高め」、2月「平年並み」。

南部:10・11月「平年並み」、12月「かなり高め」、1・2月「平年並み」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

沖縄北西方の黒潮の流路は、秋季は「大陸寄り」、冬季は「平年並み」。流量は、秋季は「かなり少なめ」、冬季は「やや多め」で経過。

薩南海域における黒潮北縁域は、10～1月は「屋久島南付近での変動」で経過。2月は「接岸」、3月上旬は「離岸」で経過。

(2) 海面水温

10・11月「平年並み」、12～2月「やや高め」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沖合:10・11月「かなり高め」、3月「平年並み」。

山口県沿岸:10・11月「やや高め」、1月「はなはだ高め」、3月「やや高め」。

対馬東水道:10・11月「平年並み」、12月「かなり高め」、1月「平年並み」、2・3月「やや高め」。

壱岐水道:11月「平年並み」、2月「やや高め」。

五島西沖:11月「平年並み」。

五島灘:11・2月「平年並み」。

天草西沖、西薩・甕沖、薩南沿岸、薩南沖合:11・3月「平年並み」。

沖縄島南東:10・11月「平年並み」、3月「やや高め」。

(2) 表層塩分

山口県沿岸：10月「やや高め」、11・3月「平年並み」。
山口県沖合：10月「やや高め」、11・1・3月「平年並み」。
対馬東水道：10・11月「やや高め」、12～3月「平年並み」。
壱岐水道：11・2月「やや高め」。
五島西沖：11月「平年並み」。
五島灘：11・2月「平年並み」。
天草西沖、西薩・甕沖：11・3月「平年並み」。
薩南沿岸：11月「平年並み～やや低め」、3月「平年並み～やや高め」。
薩南沖合：11・3月「平年並み」。
沖縄島南東：10月「かなり低め」、11月「やや低め」。

3. 現況(2005年3月上旬)

(1)大陸棚上

海面水温は北部・南部とも「やや低め」。

(2)黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「離岸」。海面水温は「平年並み～やや低め」。

(3)対馬暖流域

海面水温は「平年並み」。

(註)引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」： 約22年に1回程度の出現確率

「かなり」： 約7年に1回程度の出現確率

「やや」： 約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」： 約2年に1回程度の出現確率

参加機関

山口県水産研究センター

福岡県水産海洋技術センター

佐賀県玄海水産振興センター

長崎県総合水産試験場

熊本県水産研究センター

鹿児島県水産技術開発センター

沖縄県水産試験場

社)漁業情報サービスセンター

独立行政法人 水産総合研究センター 西海区水産研究所

東シナ海～日本海西南域あじ・さば・いわし長期漁況予報

今後の見通し(2005年4月～2005年9月)

対象海域:東シナ海～日本海西南海域

対象漁業:まき網、定置網、その他

対象魚群:0歳魚(2005年級群(2005年生まれ))、1歳魚(2004年級群)、2歳魚(2003年級群)。魚の大きさは、あじ・さばは尾叉長、いわしは被鱗体長で表示。

1. マアジ

(1)来遊量:前年を上回る。

(2)漁期・漁場:沖合域の漁況は前年を上回り、沿岸域の漁況は前年・平年並み。

(3)魚体:15～25cmの1歳魚(ゼンゴ・小銘柄)が主に、5～15cmの0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)と25cm以上の2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。

2. マサバ

(1)来遊量:前年を上回る。

(2)漁期・漁場:沖合域の漁況は前年を上回り、沿岸域の漁況は前年・平年を上回る。

(3)魚体:25～28cmの1歳魚(豆・小銘柄)が主に、15～25cmの0歳魚(豆銘柄)も漁獲される。

3. ゴマサバ

(1)来遊量:前年を上回る。

(2)漁期・漁場:沖合域の漁況は前年を上回り、沿岸域の漁況は前年・平年を上回る。

(3)魚体:25～30cmの1歳魚(豆・小銘柄)が主に、15～28cmの0歳魚(豆銘柄)と30cm以上の2歳魚(中銘柄)以上も漁獲される。

4. マイワシ

(1)来遊量:前年並みで低調。

(2)漁期・漁場:沿岸域で散発的に漁獲される。

(3)魚体:15～18cm程度の1歳魚(中羽銘柄)が主に、18～20cmの2・3歳魚(大羽銘柄)が混じる。

5. ウルメイワシ

(1)来遊量:前年・平年を下回る。

(2)漁期・漁場:漁期後半を主体に、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3)魚体:漁期前半は18cm以上の1・2歳魚(大羽銘柄)が、漁期後半は5～15cmの0歳魚(小・中羽銘柄)が主に漁獲される。

6. カタクチイワシ

(1)来遊量:前年・平年を上回る。

(2)漁期・漁場:主に5～7月に沿岸域に漁場ができる。

(3)魚体:4月は10cm以上の1歳魚(大羽銘柄)に3～6cmの0歳魚(シラス・カエリ銘柄)が混じり、5月以降は5～10cmの0歳魚(カエリ～中羽銘柄)が主に漁獲される。

注:「前年」は2004年4月～2004年9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。「沖合域」は大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過(2004年10月～2005年1月)および見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マアジ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準にあったが、1980～1990年代前半に増加し、1993～1998年には高水準を維持した。1998～2000年の加入量減少のため資源は減少傾向を示したが、2001～2003年の加入量は1994～1997年の水準に回復し、2003年の資源量も増加した。東シナ海・日本海(青森県～鹿児島県)での我が国のマアジ漁獲量は、1973～1976年に9～14万トンであったがその後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980～1990年代は増加傾向を示し、1993～1998年には約20万トンを維持したが、1999～2002年は13～15万トンに減少し、2003年は15万トンであった。

(2) マサバ対馬暖流系群

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970・80年代には比較的安定していたが、1992～1996年に増加傾向を示した後、1997年以降減少し、1999～2003年は低い水準にある。東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバ漁獲量は、1970年代後半には27～30万トンであったがその後減少し、1990～1992年には13～15万トンと大きく落ち込んだ。1993年以降漁獲量は増加傾向を示し、1996年には40万トンに達したが、1997年は21万トンに大きく減少し、2002年は89千トン、2003年は90千トン、と低い水準にある。

(3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に分布するゴマサバの資源量は、1992～2003年に比較的安定して同程度の水準を保っている。東シナ海・日本海における我が国のゴマサバ漁獲量は、年変動はあるものの、1980年代以降およそ5万トン前後で推移している。1999年に近年で最高の88千トンが漁獲された後、やや低い45～63千トンの漁獲が続いており、2003年は47千トンであった。

(4) マイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海においてマイワシは、1980年代後半から1990年代前半にかけて多く漁獲されたが、その後急激に減少した。2001～2003年に漁獲量は1千トン程度で推移している。1999年には、0歳魚がやや多く漁獲され、資源状態は低位ながらも一時上向いたが、その後は減少し近年は極めて低位にある。海域によっては水揚げ量が前年を上回ることもあるが、全体として資源は低水準である。

(5) ウルメイワシ対馬暖流系群

1990年代以降では、2000年まで資源は漸減傾向にあったが、2001～2002年の加入量が以前よりも多かったため、一時的に資源は上向いた。2003～2004年の加入量は2001～2002年の加入量よりも少ないとみられる。

(6)カタクチイワシ対馬暖流系群

1990年代以降では、1995～1996年および1998～2000年にかけて資源は高水準で推移した。2001年の夏季までは沿岸域を中心に好漁が続いていたものの、2001年秋季から2003年春季までは加入量が少ない状態が続いていた。2003年秋季以降はやや好漁となっている海域が増えている。

2. 漁況の経過

2004年10月～2005年1月の大中型まき網漁業の漁場は、対馬沖、済州島沖および東シナ海中部が中心であった。この間の、大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計9万6千トンで前年(2003年10月～2004年1月)の7万7千トンを上回った。マアジは1万8千トンと前年(1万9千トン)並み、さば類は6万7千トンで前年(4万1千トン)を上回った。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1のような経過であった。マアジの漁獲量は、山口県～佐賀県の北部海域で前年・平年を上回り、長崎～鹿児島の南部海域では前年・平年並みとなった。漁獲の主体は、15cm以下の0歳魚(2004年級群、今後の見通しでは1歳魚、以下同様)と15～20cmの1歳魚であった。マサバは、海域により差があるが、全体的には前年・平年を上回った。漁獲の主体は25～28cmの0歳魚と29～32cmの1歳魚であった。ゴマサバは、好調であった前年を下回り、平年並みに推移した。体長25cm以上の0歳魚が主に漁獲された。マイワシは山口県で不調だった前年を上回ったが、その他では前年と同程度に推移した。全体としては前年を上回ったものの、平年を大きく下回った。漁獲の主体は15cm程度の0歳魚であった。ウルメイワシは鹿児島県で前年を上回ったが、その他では平年並みであった。全体として、前年を下回った。10～12月は15～18cmの0歳魚主体で、1月以降に20cm以上の1・2歳魚が主体となった。カタクチイワシは長崎県、熊本県および鹿児島県で前年を上回り、佐賀県で前年を下回った。全体としては前年を上回った。10～12月のシラス・カエリ・小羽(6cm以下の0歳魚:秋季発生群)は不漁であったが、1月以降に大羽(10cm以上の1歳魚)主体に経過した。

3. 今後の見通しの説明

(1)マアジ

例年、4～9月期には1歳魚(ゼンゴ・小銘柄)が漁獲の主体で、0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)、2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。2003年級群の豊度は2002年級群よりやや高く、2004年級群は2003年級群より豊度が高いと考えられる。2005年級群について、親魚量の水準は比較的高く、初期生残の良否に関わる環境要因の指標と見られる水温(東シナ海南部、1月)は、2004年と同程度である(水温が高いと初期生残に不利)。2005年2～3月に行った調査では、前年と同様に東シナ海南部海域に多量の仔魚分布が見られた。今後の海況によって加入量が大きく変化する可能性も高いが、2004年と同程度の加入量と見積もるのが妥当であろう。これらから、0歳魚(2005年級群)は前年(の0歳魚、以下同様)と同程度、1歳魚(2004年級群)、2歳魚(2003年級群)は前年より多いと見積もられる。これらから、全体の来遊量も前年を上回ると考えられる。

沖合域の漁況の指標となる大中型まき網のCPUE(1日当り漁獲量)は、近年、比較的高い値で増加傾向がある(参考図参照)。沿岸域の漁況の指標となる代表的な沿岸漁業の漁獲量は、近年、比較的高い値で安定している。沖合の漁況は、来遊量の増加を反映して、近年で最も好漁だった前年をさらに上回り、沿岸域の漁況は、1歳魚の分布量が少ない海域もあることから、前年・平年並みになると考えられる。

(2) マサバ

例年、4～9月期には1歳魚(豆・小銘柄)が漁獲の主体で、0歳魚(豆銘柄の一部)も漁獲される。2003年級群の豊度は2002年級群と同様に低いが、2004年級群の豊度は2003年級群より高いと考えられる。2005年級群の豊度を予測するのは困難であるが、親魚量の水準は依然低く、初期生残の良否に関わる環境要因の指標と見られる水温(東シナ海南部、2月)は2004年よりやや高い程度なので(水温が高いと初期生残に不利)、2004年級群と同程度かやや少ないと見積もるのが妥当であろう。これらから、0歳魚(2005年級群)は前年並みかそれより少なく、1歳魚(2004年級群)は前年を上回り、2歳魚(2003年級群)は前年並みかそれより少ないと見積もられる。主に漁獲される1歳魚が前年を上回ることから、全体の来遊量も前年を上回ると考えられる。

近年、沖合域・沿岸域ともに、漁況の指標は低い値で推移している。来遊量が前年を上回することを反映して、沖合域の漁況は前年を上回り、沿岸域では前年・平年を上回ると考えられる。

(3) ゴマサバ

例年、4～9月期には1歳魚(豆・小銘柄)が漁獲の主体で、0歳魚(豆銘柄の一部)も漁獲される。現在、鹿児島県沿岸域では、2歳魚(中銘柄)以上が漁獲されており、今後も引き続き漁獲されることが期待できる。2003年級群の豊度は2002年級群よりやや低く、2004年級群の豊度は2003年級群よりやや高いと考えられる。2005年級群の豊度を予測するのは困難であるが、親魚量の水準は比較的高く、2004年級群と同程度と見積もるのが妥当であろう。これらから、0歳魚(2005年級群)は前年並み、1歳魚(2004年級群)は前年より多く、2歳魚(2003年級群)は前年より少ないと見積もられる。主に漁獲される1歳魚が前年より多いことから、全体の来遊量は前年を上回ると考えられる。

近年、沖合域、沿岸域(鹿児島県)の指標はかなり変動している。沖合域の漁況は低調だった前年を上回り、沿岸域の漁況は、4～6月は1・2歳以上主体で前年・平年を上回り、7～9月は1歳魚主体で好調に推移し、期全体としては小・中銘柄主体に前年・平年を上回ると考えられる。

(4) マイワシ

2001年に対馬暖流域における産卵調査の結果が過去最悪となって以降、沿岸域でのマイワシの漁獲量は極端に少なくなった。2002年に沿岸域での漁獲量は底打ちとなり、2003年および2004年は前年を上回る漁獲量で推移しているものの、2000年以前に比べてその漁獲量は少ない。

(5) ウルメイワシ

2001年および2002年には0歳魚の加入がやや良く、来遊水準は一時上向いたものの、その後はやや漸減傾向にある。2004年の夏季に行った計量魚群探知機調査でも分布量は前年を下回っている。4月以降は産卵親魚と0歳魚が漁獲の主体となり、産卵親魚の来遊量は低いと見積もられるので、0歳魚の加入水準も高くないと判断される。

(6) カタクチイワシ

2003年秋季以降には、来遊資源量がやや上向いていると判断される。2004年初夏季に行われた新規加入量調査、および2004年夏季に行われた計量魚群探知機調査でも分布量は前年を上回った。2004年秋のシラス漁は不漁であったが、2005年1月以降に大羽(産卵親魚)の来遊量が多く、0歳魚の加入も期待できる。

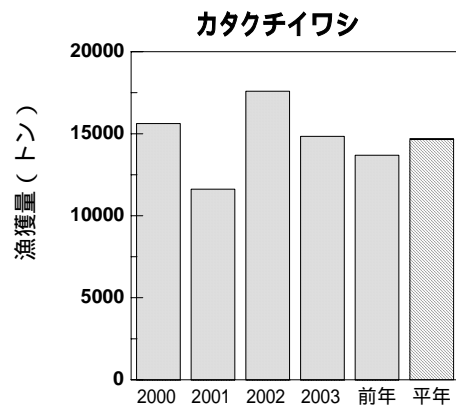
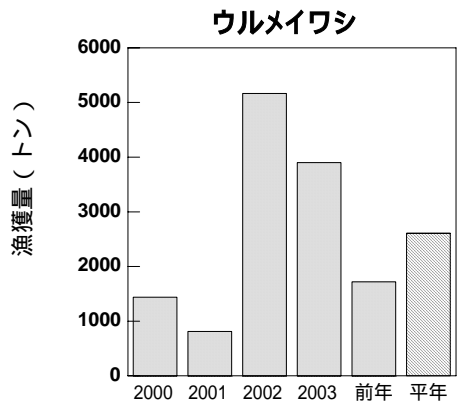
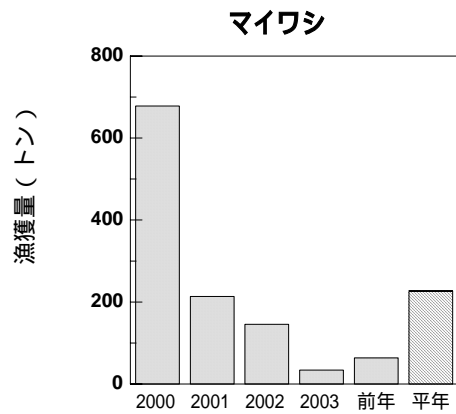
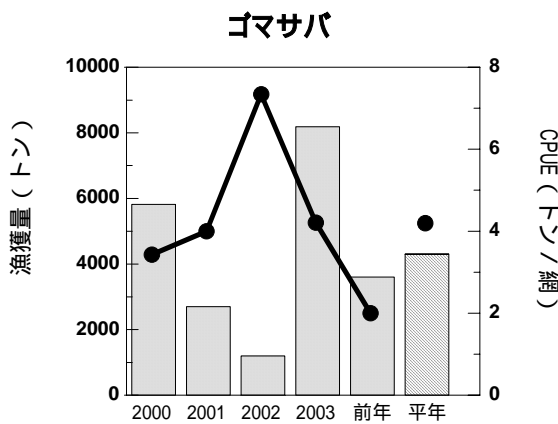
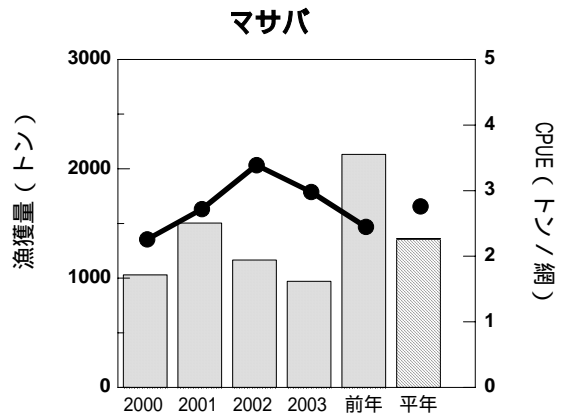
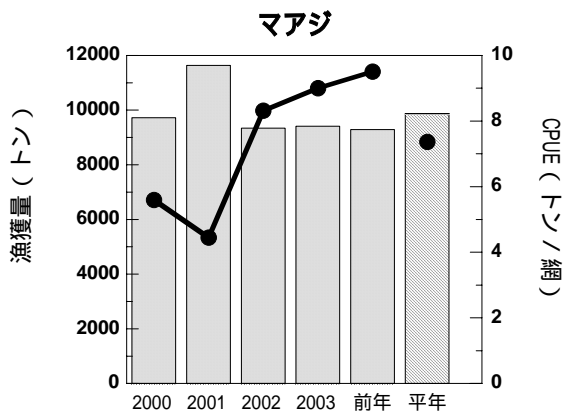
表1. 沿岸域の漁況経過(2004年10月～2005年1月、一部2005年2月を含む)

| | マアジ | マサバ | ゴマサバ |
|-----------|--|---|---|
| 山口 | 中型まき網で759トン水揚げがあった。これは前年比126%、平年比142%で前年・平年を上回った。湊地区の棒受網では、ゼンゴが10～12月にかけて1.9トン水揚げされたが、前年比73%、平年比26%と低調に終わった。 | 中型まき網で110トン水揚げがあった。これは前年比126%、平年比142%で前年・平年を上回った。湊地区の棒受網では、全く水揚げされなかった。 | |
| 福岡 | 代表港まき網漁獲量は593トンで平年比171%と、平年に比べ好漁。銘柄は中・小が主体。棒受網は129トンで平年比145%であった。銘柄は大中と小が主体であった。 | 代表港まき網の漁獲量は225トン、平年比50%と不漁。銘柄はギリが中心。棒受網では漁獲量は19トン、小、ギリ銘柄が主体であった。マメ銘柄の漁獲が全くなかった。 | 代表港におけるまき網の漁獲量は89トンで平年比82%とやや不漁であった。 |
| 佐賀 | 漁獲量は前年並みで平年を上回った。(前年比105.4%、平年比140.9%) | 漁獲量は前年を上回ったが、平年を下回った。(前年比209.1%、平年比64.3%) | |
| 長崎 | 地域により差があるが、概ね前年を下回り、平年並みであった。(前年比78%、平年比97%) | 地域により差があるが、概ね前年・平年を上回った。(前年比120%、平年比131%) | |
| 熊本 牛深港 | 水揚量は148トンで前年比106%、平年比88%であった。 | 水揚量は166トンで前年比1,506%、平年比75%であった。 | |
| 鹿児島 | 10～2月は、豆(2004年級群)主体に期間中合計1,377トンの水揚げで、前年比91%、平年比87%。 | | 10～2月は、豆・小・中小(2004年級群)主体に好調であった前年を下回り、平年並みに推移した。2月までの期間中、3,526トンの水揚げで、前年比64%、平年比112%。 |

表 1. 続き

| | マイワシ | ウルメイワシ | カタクチイワシ |
|-----------|--|---|---|
| 山口 | 湊地区では10月中心に棒受網でヒラゴが34トン水揚げされたが、他の銘柄はほとんど水揚されなかった。水揚量は、前年比192%、平年比233%と、前年・平年を上回った。 | 湊地区の棒受網は10月に大羽のみ、172トン水揚げした。水揚量は前年比27%、平年比57%と、前年・平年を下回った。 | 湊地区の棒受網で、11月にシラスが豊漁となり、全国的に品薄のため単価が2～3万円台/箱で推移したことも受け、全船(50隻)がシラス狙いに転じた。その結果、水揚量はカタクチイワシ374トン中、シラス318トン(85%、過去5年は100トン台で推移)であった。水揚量は前年比66%と下回り、平年比149%と上回った。 |
| 福岡 | 代表港のまき網において11月にわずかに漁獲されただけだった。 | 代表港まき網の漁獲量は5トン。前年比138%、平年比235%の漁獲であった。しかし棒受網では全く漁獲が見られなかった。 | 代表港まき網漁獲量は307トン。前年比557%、平年比172%と好漁であった。一方、棒受網の漁獲量は、6トンで前年比114%、平年比28%と著しい不漁であった。 |
| 佐賀 | 漁獲は全く無かった。 | 漁獲は全く無かった。 | 漁獲量は前年・平年を上回った。(前年比151.5%、平年比152.5%) |
| 長崎 | 前年同様、漁獲は低調に推移した。 | 前年を上回り、平年並みであった。(前年比268%、平年比86%) | 地域により差があるが、概ね前年・平年を上回った。(前年比208%、平年比148%) |
| 熊本 牛深港 | 水揚量は、0.2トンで前年比124%、平年比13%であった。 | 水揚量は、35.8トンで前年比11%、平年比16%であった。 | 水揚量は、221.5トンで前年比1,831%、平年比253%であった。 |
| 鹿児島 | まき網で0.1トンの水揚げと、まとまった漁獲は無かった。 | まき網では475トンの水揚げで、前年比549%、平年比111%、棒受網では24トンの水揚げで、前年比65%、平年比68%であった。12～1月に薩南海域で大羽主体の水揚げがあった。 | まき網では577トンの水揚げで、前年比262%、平年比321%、棒受網では136トンの水揚げで、前年比342%、平年比430%。1月以降北薩海域で大羽主体の水揚げが続いている。 (シラス)西薩海域では、1,146トンで前年比371%、平年比151%、志布志海域では346トンで前年比159%、平年比114%。 |

注:「前年」は2003年10月～2004年1月、「平年」は過去5年の平均値。



今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量(沿岸漁況の指標の一つ;棒グラフ)と大中型まき網の1日当たり漁獲量(沖合漁況の指標の一つ;折れ線グラフ、CPUE)。沿岸漁業の漁獲量は、マサバは山口県～熊本県(ゴマサバを含むが主にマサバ)、ゴマサバは鹿児島県(マサバを含むが主にゴマサバ)、その他は山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。4月～9月。平年は過去5年平均。